

## 『都市に聴け』を読む



副題「アーバン・スタディーズから読み解く東京」の本書を一気に読んだ。都市学者の町村敬志さんらしいタッチで書かれた東京論・都市論であり、東京の街などに出かけたくなる。目次から紹介したい。

- 第1章 東京から考える ●アーバン・スタディーズという冒険
- 第2章 だらだら広がる都市の秘密 ●東京はいかにして東京になったのか
- 第3章 都市はメガイベントで輝いたのか ●出来事から考える
- 第4章 一極集中のおモテとウラ ●産業・仕事・格差
- 第5章 奪われる東京 ●「空間争い」の時代に
- 第6章 「東京政治」の溶解と再生 ●責任ある知事がなぜ現れなかったのか
- 第7章 都市に出来事を取り戻す ●社会が再び動き出す都市へ

7章から構成される本書は、都市社会学の成果を踏まえながら、「時間軸と空間軸」という2つの分析軸を駆使して展開されている。本書の特徴の一つは、数多くの写真が活用されていることだ。「多くは筆者が東京のさまざまな現場で撮影したものである。ヒト・モノ・ココロの間に横たわる余白は、都市の現場では言葉にならない何かによって絶えず埋められていく。情念はしばしばモノによって表出される。瞬間の現場を切り取る素材として写真は雄弁である。」

もう一つ特徴として指摘したいのが、数多くの工夫された図表である。「ヒト・モノ・ココロの諸要素間の多様な出合いを切り出し示す方法として、地図や各種統計、社会調査の成果などを活用する。できるだけ筆者独自の視点からデータを加工しながら、自ら語ることにないモノの世界の存在感を浮かび上がらせることを心掛けたい。」

とりわけ注目したのが、第4章図3 東京都区部の経済世界である。「作成にあたってはまず、各業種のビジネスの主要対象が事業所なのか個人なのかを基準にグループ分けをして、そのうえで産業相互の連関が明確になるように類型を設定し、それぞれにどのような業種が属するかを産業小分類ごとに判定していった。」

この図を作成するためには、膨大な作業が必要であったことだろう。筆者の問題意識の一つが次のように書かれている。「東京23区には2018年時点で約700棟の超高層オフィスビル（高さ60メートル以上）が建っている。光り輝くその巨体は、一見すると華やかな先端業種と富の集中を象徴するかに見える。東京各所でフィールドワークを始めた1980年代、増え始めた超高層ビルを1棟ずつ訪ねてその利用形態を調べ始めた筆者にとって印象的であったのは、モダンな外装とは裏腹に超高層ビルの内部には多様な人びとが働いていることであった。オフィスビル機能させるためには、きわめて幅広い周辺的なサービスが必要となる。一言で言うと、超高層の空間は外から見るよりもずっと人間臭く、しかも格差を含んだ世界であった。」

(2021年4月16日)